



今年から開始した無農薬キャベツの収穫作業。大野台に8haの団地を設置。(写真提供：森吉町)

# 徹底した「土づくり」の指導による農業振興（森吉町）

消費者ニーズに応じ、生産性追及から安全・良食味といつ付加価値の高い農作物生産への転換に、町を上げ取り組んできた森吉町。減農薬・無農薬栽培を普及させ、食味値80を目指した「土づくり」など、優良な農作物を安定生産しています。

## 安全性を求める市場と

### ニーズに応える農業

森吉山を源とする大小の溪谷を集め、太平湖を経て阿仁川へと注ぐ清流小又川が、町を東西へ貫流する森吉町。様々な自然の造形とともに、四季折々の表情を見せる溪谷美は、秋田を代表する観光地の一つとなっており、その保全と利活用に取り組む同町は、平成8年、国土庁により「水の郷百選」に認定されています。

面積の8割を山林に囲まれながらも、河川周辺には沃土を持ち、稲作・畑作・酪農と、農業を基幹産業とする典型的な山村です。しかし、炭鉱閉山後の昭和40年代から過疎化

が進んだことで農業人口も半減し、また、現在では町の高齢化率も3割を越え、農業の衰退が懸念されてきました。

一方、農業全体を取り巻く環境は、安価な輸入農作物の増加により、国産品価格が下降するなど、市場は急激に変化しました。そうした中、国

町が農家に配布している、土づくり啓蒙用パンフの内容。

土づくりに欠かせない有機堆肥を生産する「有機センター」外観。



民の消費者ニーズも「安く大量に」「から安全でおいしい」「農産物へと変化してきました。町では、農業の活性化を目的に、土壌改良を基盤とした高付加価値農産物の生産を目指し、「減農薬栽培」に取り組むこととなります。

### 土づくりに向けた

#### 有機堆肥生産の開始

化学肥料に頼ってきたこれまでの農業は、その堆積が土壌の悪化を生むことで連作障害を引き起こし、作物の生育を阻害してきたため、農業者はその対策に苦慮してきました。

町では、「まずは土づくりから」と、特産の酪農業から発生する糞尿を活用し、有機堆肥生産を目的とした第3セクター「有機センター」を平成10年に開設、環境改善とリサイクルのいわゆる循環型農業を開始します。ここでは畜産農家9戸・680頭の牛舎から排泄される蓄積糞尿に粉殻・オカ屑を配合して発酵処理した堆肥を生産しており、現在では年間2〜3

000tを販売しています。有機堆肥は、土に持久力を与えるほか、根張りを良くして成長を助け、作物を良食味にします。町ではこの有機堆肥にかかる購入額の半分を助成し、有機農法の啓蒙・推進に努めてきました。

### 活性水の利活用と

#### 木酢液の試験的併用

また、同センターで堆肥を生成する際に1日約7tも排出される「活性処理水」を有効利用しようと、平成11年1haの水田に試験的にかん注しました。処理水は微生物の働きによりミネラル分などを多く含んでいるため、結果的には期待どおり病害虫に強くなり、食味値・収量もアップしたことから、かん注は適正量を探りながら、12年に20ha、13年度に85haまで拡大されました。

他方、減農薬栽培の欠点である病害虫に対しては、忌避効果の高い木酢液で対応します。町ではすでに平成7年に木酢液の抽出施設を建設しており、農家をはじめ各家庭にも提供しています。木酢液は防除以外にも食味や土壌の改



森吉町産の木酢液。

良にも有効であることが確認されており、町では稀釈濃度や投与方法等についてもさらに実験を続けています。

そして現在は、有機堆肥・活性処理水・木酢液だけで作る「無農薬栽培」にも取り組んでいます。

### 産地の差別化を図る「もりよし有機80」

町では、県循環型農業システム推進チームの支援も受けながら、実証圃による化学肥料・生ゴミ堆肥・有機堆肥の生育比較調査を行っており、有機堆肥

を活用した循環型農業の有効性を確認しています。また、減農薬・無農薬栽培による稲作への取り組みは「もりよし有機80」と名付けられ、食味値80以上の良質米の安定生産を目指しています。他方、各機関と共同で下水汚泥をも活性水として処理し、農業に還元する研究も進めており、循環型農業をさらに発展させていく計画です。

農産物に付加価値を与え、差別化を図る同町の取り組みは、地域農業の活性化を生むとともに、他地域をリードする事例を築き上げています。



循環型農業試験圃。減農薬による水稲栽培の実証。